

「世界に果てなんてない！」

第1章 初めて行った海外～東ティモール編～

この文章を読んでいる方は「海外」と聞いて、どういった国を思い浮かべるでしょうか。私の場合、高校生くらいまでは「欧米」くらいしか思い浮かびませんでした。しかし、大学以降は、一般に「世界の果て」や「辺境」と呼ばれるような国々を訪れることとなります。第1回目として、私が初めて訪れた国「東ティモール」の話をしていきたいと思いません。

一国際協力サークルに入る

私は振り返ると高校までは、まさか自分が海外に関わる仕事をするようになるとは、思ってもいませんでした。日本を出るという意識のない高校生でした。

それが変わったのが、大学の時です。大学に入学し「ボランティアをしたいな」と思って、国内国外問わずに色々なボランティアサークルを見て回りました。なぜ「ボランティア」に興味があったのかというと、中学の頃にあった出来事が大きなきっかけの1つになっています。



写真①東ティモールの海岸風景

中学生の頃、幼稚園の時から仲の良かった友人が学校に行けなくなってしまいました。でも、放課後は家に遊びに来てくれて一緒に過ごしていました。友人なので学校に来てほしいなと思っていて、でもどうして学校に行けないのであればその理由を分かりたいと思ったのですが、なかなか一歩踏み込んで話すことが出来ませんでした。そして、しばらく経ってその友人は遠くに引っ越してしまいました。

そのことが私には心残りでした。「なんでもっと話を聞くことが出来なかったのだろう」と、自分自身が不甲斐ない人間に思えました。心の中がすっきりしない、そんな日々を過ごしました。その気持ちは今でも心の片隅に残っています。ただ、中学時代にいろいろ悩んだ末に「今はまだ子供で力がないけど、大きくなったら人の役に立ちたいな」と漠然とした想いが芽生えていきました。

そうして高校、大学と進み、「何か人の役に立てることはできないか」と思って、「ボランティア」の出来るサークルを探すこととなります。そして、いくつか見た中で私が惹か

れたのが「国際協力サークル」でした。そのサークルでは、東ティモールという国で活動しているのだという。ほとんど初めて聞いた国、東ティモール。私は直観的に国際協力サークルへの参加を決めました。

一初めての海外、東ティモールへ

前置きが長くなりましたが、こうして国際協力サークルに入り、サークルで夏休みに東ティモールで活動するというので、私の初めての海外は東ティモールとなったのでした。

東ティモールは2002年に独立をした国で、それまでインドネシアと独立のための紛争を行っていました。事前に紛争当時について書かれた本を読んでいて、私の中で東ティモールのイメージは「貧しくてかわいそう」というものでした。

私は夏休みに、どうしても取らなければならない大学の夏季集中講義があった関係で、サークルの先輩たちとは別日程で、1人で現地集合という形になりました。

今となっては何とも思わなくなっているのですが、当時の私は空港の手続きから全てが初めてで、緊張していたのを今でも思い出します。どうにか2回の乗り継ぎ（1回は空港の外に出て宿泊の必要あり）を行い、東ティモールに到着します。

そして首都ディリでサークルの先輩たちと合流し、すぐさま活動地であるロスパロスという町に移動しました。ロスパロスは東ティモールの東の端にあり、車で5時間程度かかります。

移動中の車の窓から見るもの、感じるもの全てが新鮮でした。照りつける南の国の日差し、熱を帯びた風、エメラルドグリーンの海、紛争時に焼かれてしまった山々、ところどころ壊れている道路、トタン屋根の家々……。日本では感じる事のなかった空気感、見る事の無い風景でした。

一のどかな町ロスパロスで国際協力

首都ディリから車を走らせること5時間、目的地であるロスパロスに着きました。東ティモールの中では大きな町とのことですが、日本のイメージだと「○○村」の中心地と思って頂ければ、なんとなく分かるかと思えます。

道を歩いていると、外国人が珍しいのか沢山の子どもたちが「写真とって！」と言って近づいてきます。1度写真を撮るごとに子どもたちは盛り上がります。大人の人たちも、どこか穏やかで、のんびりと暮らしているように見えました。



写真②ロスパロスの子ども

そんなロスパロスで、サークルの具体的な活動としては、アクセサリー作りを現地の人々に伝えるというものでした。東ティモールでは、失業率が高くなかなか現金収入の機会がありませんでした。

そのため、何か出来ることはないかということで、アクセサリーの作り方を教えて、出来たアクセサリーを東ティモール国内、あるいは日本で販売し、そのお金を現地に還元するというものでした。つまり、「ただモノをあげるのではなく、現地の人々の自立のため、アクセサリー作りを通した現金収入でサポートする」という考えの下で、実施していました。



写真③活動風景

一生活きている限り、続いていくもの

東ティモールに滞在していると、だんだんと仲の良くなる人も出てきました。仲良くなると、いろんなことを話してくれるようになります。中にはインドネシアとの独立のための紛争の話も、話してくれる人もいました。

紛争時には多くの東ティモール人が虐殺されたと言われています。そのため、東ティモールの人に話を聞くと、身の回りの誰かは紛争の犠牲になっています。

残酷な話もあるのですが、私は「インドネシアの事を恨んだりしないのだろうか？」と疑問に思います。本当に仲良くなった方に話を聞くと、「インドネシアを恨まない」という答えが返ってきます。なぜなら、今を大切に生き残った人々で生きていくことが大切だと、話してくれるのです。(この辺りをもっと詳しく知りたい方は、広田奈津子監督ドキュメンタリー映画「カンタ！ティモール」で、同様の現地人の声を聞くことができます。)



写真④紛争の壁画を見る少年

このように話してくれる東ティモールの方々に私は感銘を受けました。なぜ恨みを捨てる事が出来るのだろう、辛い過去を背負ってでも今を大切に生きていく事が出来るのだろう。まるで、日本で生きている自分がちっぽけな人間に思いました。

同時にこういう声も聞きました。「東ティモールで起きた悲劇を忘れないでほしい」という声です。世界の人びとから忘れられることが、一番怖いと言います。この話を聞いたと

き、大きな悲劇は過去になることはないのだな、と思いました。悲しみや苦しみは薄れることはあっても、消えるものではないのだ。その人にとっては、生きていく限り続いていくもの。

この「生きていく限り続いていく」という感覚は、その後の私の生きるテーマにもなります。私自身が、とある犯罪の被害に遭ったことがあります。それを記憶から消してしまおうと、しばらく思っていました。しかし、私はこれまで3度ほど東ティモールへ行っているのですが、その中で東ティモールの人びとと接することで、過去を自分の心で引き受けて、強く生きなければならないと決意します。これは、東ティモールの人々が辛い紛争があっても、今を大切に生きている姿から学んだことです。

一現地のためとは何なのか？

夏休みの間の活動を通して、「現地の力になるためには、夏休みだけ行って活動するだけではなく、継続した活動が必要なんじゃないか」という話が、サークルの中で出ました。夏休みだけ行って、東ティモールの人びとと話をするだけでは、やはり足りないし私たち日本側の思い込みも多くなってしまいます。それでは現地の力になれない。1年生だった私も、その意見に同意しました。



写真⑤手を取り合う親子

その後、サークルだった団体は組織体制をしっかりとするためにNPO法人格を取得しました。また資金の面ではJICA草の根協力支援を受けて、日本人2名を現地駐在員として派遣し、現地の人々に寄り添った国際協力を目指しました。

現地駐在員を派遣すると、その2人を通じて現地の人々の色んな声を聞くことが出来るようになりました。しかし、すぐに試練が訪れます。東ティモールの治安悪化が原因で、日本人に退避勧告が出てしまいます。そのため、日本人の現地駐在員も日本に帰国しなければならなくなりました。

現地駐在員がいない中でも、どうにか電話やメールなどの遠隔で事業を継続しましたが、そのやり方だと見えなくなるものが多くなります。現地に寄り添ったことをしなければならぬのに、現地とのコミュニケーションが大幅に減ってしまったのです。そういう状態で、日本で活動していると、本当に現地の役に立っているのか、それが分からなくなるのです。現場にいないのに何かを決定することは、私たちの側の身勝手に過ぎないのではないかと考えるようになりました。

(第2章東南アジア歴訪！？～カンボジアを中心に編～へ続く)